

## 経済学と労働価値説(前編) : 『資本論』の歴史的役割と理論的超克

逢坂, 充  
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1957502>

---

出版情報 : 経済学研究. 85 (2/3), pp.25-41, 2018-09-19. 九州大学経済学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 経済学と労働価値説（前編）

——『資本論』の歴史的役割と理論的超克——

逢 坂 充

[I] はじめに一労働価値説の運命を問う

[II] 古典学派労働価値説

(A) 労働価値説の革新性

(B) スミスと支配労働価値説

[III] 新生労働価値説

(A) マルクスと投下労働価値説

(B) 魅力に富む価値形態論の主題

(C) 「搾取する労働」を跳躍点にして

[I] はじめに一労働価値説の運命を問う

広く知られているように、経済学はアダム・スミスを以って始祖とし、そして18世紀に、スミスを師とするイギリス古典学派による労働価値説の唱導とこの学説をめぐる論争と彫琢のなかで確立した。その後、19世紀には、この古典派的労働価値説は、本稿で取り上げるカール・マルクスの『資本論』の中で、批判と受容の厳しい理論的葛藤を通して精緻に練り上げられ、新たな生命を吹き込まれて不死鳥のように蘇った、とはよく言われることである。その意味で、マルクスの労働価値説を新生労働価値説と称しておこう。

けれどもそれ以来、現代の経済学は、このマルクスの新生労働価値説を、——マルクスが古典学派に対峙したような受容と批判とのない混ざった立場からであれ——ともかく受容するか、それとも否定して全てを拒否するか、といった二者択一に分裂した結果、今日、周知のように経済学は、マルクス経済学と近代経済学という

二つの経済学に大きく分解し、双方が互いに無縁な学問として併存する時代になった。

そうした時代状況の21世紀の現代において、スミス以来多くの先人達が滔々と築き上げてきた労働価値説は、この21世紀の現在、なお依然として光彩を放ち続けて生き長らえることができるであろうか？

しかも、世界の冷戦構造が崩壊して社会主義を標榜した国々が多く消滅してしまった現代、この労働価値説の歴史的役割とは一体何であろうか？それは既に終わったのであろうか？

じつは、こうした疑問が本稿を貫く問題意識である。

もし、幸い生き延びることが出来るならば、何処に、どのような生命維持の鍵があるのか、探し求めなければならない。また、もし何時の日か、この労働価値説の命運が尽きるのであれば、それはどのような諸条件の未来社会なのであろうか？

要するに、もしあるとすれば、これから未来に向かって躍動する労働価値説の生命力と、そ

してその運命とを、私は問いたいのである。

## [II] 古典学派労働価値説

### (A) 労働価値説の革新性

まず最初に、以上の問題意識に必要な限りで、古典学派労働価値説の革新性について、スミスの所説を中心に概観しておこう。

さて先程、経済学はスミスから始まったと述べたが、学説史上は、スミス以前にも、じつは重商主義とF・ケネーの重農学派とが独自の学説と思想を披歴していたことはよく知られている。にも拘わらず、スミスが経済学の父として尊敬され、今日なお経済学に大きな影響を与え続けているのだが、ではその最大の理由は何であろうか？

それは、端的に言って、スミスが経済社会の問題を、生活者としての人間の立場から人間の生き方の問題と結び付けて考察し研究した、最初の経済学者であったからだ、とあってよい。

そこで、このような立場と問題意識から、人々の日常生活を素直に観察すると、まず問われるのは、人々にとって豊かな生活とは何か、それはどういうことか、ということであり、別言すれば、生活者にとって富とは何か、それは具体的に何であるのか、ということである。そしてじつは、このようなスミスの問題提起が如実に語られていたものこそ、他ならぬスミスの著書のタイトルそのものであった、といってもよからう。それは、『諸国民の富の性質と原因に関する研究』(“An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations”)という少々長いタイトルであって、そのためわが国では一般に『国富論』と略称されている。

このタイトルからも明らかなように、富の概

念が当時の国家や王権といった為政者にとっての富ではなくて、「国民の富」という発想から、『国富論』は、国民にとって富とは何か、すなわち国民の富の性質あるいは本質、そしてその原因を問うているのである。この立場からの問題提起によって、国民の富とは「国民が年々消費する生活必需品および便益品のすべて」という具体的に明快な富概念がスミスによって宣言されることになった。

ところで、上のような「国民の富」概念は、今日からみれば何の変哲もない当然なことではあるが、スミスが生きた18世紀の時代ではそうではなく、先にも触れたように、当時は富とは国家と権力者にとっての富であり、実際にも金銀財宝や貨幣が富と観念されていたのである。したがって、スミスの富概念は経済学説史上まさに革命的な転回を意味するものであった、ということができる。もっとも、スミスのような富概念を認識するには、歴史上、生産の社会的分業とそれに基づく商品交換とが日常的に行われる経済社会の成立が不可欠であるが、スミスは、イギリスで始まったこのような近代化への転進をいち早く洞察することによって、新しい富概念を認識することができたのだ、とあってよい。

さて、スミスの富概念からは、この富を生み出す原因が国民の生産活動と労働(スミスのタームで *toil and trouble*)に求められたのも至極当然であり、「国民の富」が生産者の労働と直接結び付けて理解されることになる。したがって、「国民の富」の増進には、労働の生産力を高めるための方法、技術、手段あるいは政策などの問題について、また生産の社会的分業化と商品交換の発展としての、いわゆる市場経済の様々な問題、この市場経済を支える諸階級と私

有制の問題や資本の競争の問題など、さらには「国民の富」増進の立場から、国民経済の再生産と経済成長、貿易と植民地など国際経済の諸問題に至るまで、およそ現代の資本主義経済システムに関して今日なお連綿と問い続けられている基本的な諸問題について、体系的に考察したのが『国富論』であった、ということは周知の通りである。そして、スミスが以上のような国民経済の構造を国民の労働と勤勉を基底に据えて体系的に把握した彼の卓越した学識によって、労働価値説が経済構造を解明するに足る確かな学説理論となった。それは、生産の分業化と商品交換が日常的に行われる商業社会においては、商品の価値を規制する原理として、スミスが直截に説く「労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」という、労働による商品価値の規定である。

もっとも、スミスが労働価値説の最初の提唱者であった、というのではない。B・フランクリンも既に同様の所説を次のように述べていた、という。

「一国の富は、その国民が買うことのできる労働量によって評価されるべきであって、その国民が所有する銀や金の量によって評価されるべきではない。……およそ商業はある労働と他の労働との交換にほかならないから、すべての物の価値は労働によって最も正しく評価されるのである。」

上の文章は『資本論』からの引用であり、その箇所は相対的価値形態のa項にある注17aである。ここでマルクスは、フランクリンを「価値の性質を見抜いた」と高く評価しながらも、上の文中にあるフランクリンの「労働」について意味深長な批評を加えているが、この点は後ほど機会を得て指摘することにしよう。

さて、以上のようにフランクリンやスミスが商業社会における商品交換関係は、社会的には労働と労働との相互の交換に帰着する、と解したが、その理由は、商品交換とはそれらの商品を生産した諸労働の生産物の交換に他ならないということ、つまり商業社会を労働生産物が商品化された社会だと認識したからである。そして、このような認識を可能にしたものこそ、前にも指摘して繰り返しになるが、当時のマニュアルファクチュア段階においても急速に進展した社会的分業による生産体制の変革であったことはいうまでもない。このように、生産の社会的分業化を歴史的条件として商品交換が必然化するという、社会的分業と商品交換との密接な関連が認識されて、労働価値説は一層確固不動の学説になった、と行ってよいかも知れない。確かに、この点は、フランクリンやスミスらが時代の変革を透視した深い洞察と鋭い慧眼をもって切り開いた労働価値説の革新性として高く評価すべきであろう。マルクスも同様に、社会的分業は商品生産と交換の「存立条件」と述べている。

けれども、社会的分業を存立条件として一般化する商品交換社会の認識から、商品価値の実体は労働である、と宣言する労働価値説が完全無欠な確固不動の学説に一見えるけれども一なっただけではないのである。なぜなら、商品価値の実体が労働であるという認識で終わっただけでは不完全であって、この認識の前提の上で、次のような課題が改めて問われなければならないからである。ではなぜ労働が、そしてどのような労働が、またどうして商品の交換価値になるのか、という新たな課題が提起され、この課題に答えなければ、それは完全ではないからである。しかも、商品の交換は商業社会では等価交換が原則であるから、どのような労働が等価

となり等価として認められるのか、という問題にも答えなければならないからである。つまり、商品価値の実体を労働だと認識した上で、今度は商品価値と労働との関連が改めて問われなければならないのである。

### (B) スミスと支配労働価値説

さて、以上のような課題に対して、じつはスミスも彼なりの独自の見解を示して答えていたかにも見える。それは、一般に支配労働価値説と称されていて、商品の価値は交換によって獲得される他の商品の生産に投下された他人の労働によって規定され、その価値量は他人の労働の量に等しい、というものである。このスミスの支配労働による価値規定で特に留意すべき点は、商品価値が自分の商品の生産に投下した自分の労働を意味しない、したがって自分の投下労働ではない、ということである。要するに商品交換とは、自分の商品で他人の労働を支配し、購買することだ、というのがスミスの理解であった、といってよい。これに対して、自分の投じた労働による商品の価値規定は通常投下労働価値説と称されていて、しばしばスミスの『国富論』中にはこの両方の価値説が混在している、と批判されてきた。けれども、スミスは、投下労働による価値規定は「初期未開の社会」に妥当するものであって、資本の蓄積と賃労働に基づくブルジョア社会では、投下労働価値の規定は通用しないと否定して、支配労働価値説を明確に主張していたのである。

では、スミスに問いたい、どうして支配労働価値説なのか？

その理由の一つは、スミスが、ブルジョア社会では各階級に対して、資本家には利潤、労働者には賃金、地主には地代という収入が与えら

れるが、これらの収入は生産された商品の販売を通して分配されるという再生産の観点から、商品の価値を改めて規定したことによる。それは、これら三大階級の収入から構成される価値構成説といわれるものであるが、じつはこの構成価値説は投下労働価値説とは論理的に矛盾して両者の両立が説明できず、むしろ支配労働価値説と極めて親和的であったからだ、と解することができる。

さらにもう一つ別の理由を挙げれば、スミスの労働観との関係が指摘できそうに私には思われる。スミスにとって、本来労働とは「自分の安息・自由・幸福の同一部分をつねに放棄し犠牲にすること」と同義であった。とすれば、商品の交換価値が他の商品に投下された他人の労働を支配し購買するということは、この購買によって自分の労働である *toil and trouble*（労苦と煩勞）を省いてくれて「自分の安息・自由・幸福」をエンジョイすることに等しい、ということになる。このような *toil and trouble* の労働観と結びついて、スミスが支配労働価値説を主張した、と解されるからである。

だがしかし、スミスの *toil and trouble* なる労働が先の課題である、どのような労働か、という問題に十分答えている、とは思われない。そもそも *toil and trouble* がどのような性質の労働なのか、それ自体判然としないからである。これは生産と直接結びついた労働なのか、それとも「安息・自由・幸福」など消費と結びつけられた労働なのであろうか。あるいは、この労働は、個人の私的労働として商品の使用価値を作る有用労働なのか、それとも、マルクスのタームでいえば、価値を生み出す社会的労働としての抽象的人間労働なのか、または、この両者の性質を含んだ二重性のものとして理解されてい

たのか、およそ明確ではないからである。

このようなスミスの曖昧な労働の把握に対して、以前に注目して保留しておいたフランクリンの文中にあった「労働」について、マルクスが以下のように述べていた趣旨を、スミスとの対比で考慮すると、大変興味深いものがある。

「フランクリンは、すべての物の価値を「労働で」評価することによって、彼は交換される諸労働の相違を捨象し—したがってそれらの労働を同等な人間労働に還元しているのだ、—ということ意識していない。とはいえ、彼は自分の知らないことを言っているのである。彼は、まず「ある労働」と言い、次に「他の労働」と言い、最後に、あらゆる物の価値の実体としての、そのほかになにも形容詞のない「労働」と言っているからである。」（『資本論』マルクス・エンゲルス全集版、国民文庫、(1)分冊、岡崎次郎訳、65ページ。以下、引用文は全集のページ数のみ記す）

以上、スミスの労働価値説を中心に古典学派の特質を概観してきたが、そこから新たに提起された課題を、本稿の問題意識に沿う形で簡単に整理しておこう。

古典学派労働価値説は、彼らの明察によって、商業社会における商品交換関係は、それらの商品を分業によって生産した「ある労働」と「他の労働」との交換関係に還元して事実上「形容詞のない労働」を抽象化し、したがって「労働」相互の交換に帰着する、という認識を基礎にしていた。この認識から、「労働」を「交換価値の真の尺度」と規定した上で、交換価値を規制する原理が、支配労働価値説とこれと対立する投下労働価値説となって展開されたのである。

さて、それでは上の新たな課題を一層深掘りするために、目を現実の過程に転じて、現実の商品交換の過程を改めて観察しよう。じつはこ

の過程は、いうまでもないが、商品と商品とが直接交換される過程ではない。いわんや「ある労働」と「他の労働」との直接交換ではもちろんありえない。形態上は、価格の付いた商品Aと貨幣との交換であり、次いで貨幣と他の商品Bの価格を通じた交換、というように、貨幣を媒介にした交換であり、したがってこの二つの過程の媒介による商品の流過程として行われ、しかも商品Aと商品Bとの交換は等価を前提に行われる交換である。

してみれば、この貨幣を媒介に行われる現実の商品交換過程について、上の課題が再度同様に提起されねばならないであろう。即ち、この現実の過程において、どのような労働が、どうして諸商品の価値を規定し、そしてこの労働と諸商品に付された価格とはいかなる関係なのか、どのような労働が等価として認められるのか、さらにどのような労働が交換を媒介する貨幣といかに関係するのか、という問題である。そして、この問題の考察のためには、比喩的に言ってスミスの *toil and trouble* の曖昧な労働を分解して、労働を現実の過程に即して適確に分析し、厳密に概念化する必要がある。古典学派には、この新たな課題への自覚が欠けており、労働も単なる労働一般に終始していて、どのような労働が、あるいは労働のどのような性質が商品の価値になり、そして貨幣といかなる関係にあるのか、といった問題に気がしえなかった、といってよい。換言すれば、古典学派が気付かなかったこの新たな課題を分析して解明しない限り、彼らが抽象によって発見した「労働はすべての商品の交換価値の真の尺度」という学説が不動の真理である、ということを実証したことはないのである。

この課題を端的にいえば、それは、古典学派

が抽象した労働を分解して、新たに把握された労働が、現実の過程における商品交換関係と、さらに貨幣とどのような関係にあるかを論理的に解明する問題である。そして、この貨幣との関係を明確にしない限り、労働価値説は確固不動の理論として完結しないのである。

さて、以上述べた論脈から、古典学派に欠けていたこの課題に挑戦した人物、彼らの曖昧模糊たる労働を概念的に整序して古典学派労働価値説に新たな生命を吹き込んで蘇らせた偉大な人物、それがマルクスであったことは、言うまでもない。『資本論』第一篇の第一章商品論が全てこの課題の考察に充てられているが、第三節の価値形態論との関連で、マルクス自身が古典学派労働価値説の欠陥について次のように述べて、この課題への挑戦を宣言していたことも周知の通りであろう。

「経済学は、不完全ながらも、価値と価値量とを分析し、これらの形態のうちに隠されている内容を発見した。しかし、経済学は、なぜこの内容があつたのか、つまり、なぜ労働が価値に、そしてその継続時間による労働の計測が労働生産物の価値量に、表わされるのか、という問題は、いまだかつて提起したことさえなかったのである。」(95ページ)

この課題と理論的に格闘して闡明にすることをもって、古典学派の労働価値説が、いまやマルクスの新生労働価値説として蘇つたのである。また同時に、この新生労働価値説の基本となるキーワードが、これまでの論脈から推察されるように、古典学派の曖昧模糊の労働とは対照的に「商品に表される労働の二重性」論であった。そして、次のように指摘する。「この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点である」(56ページ)、と。

ところで、じつは「この点」は、本稿の「はじめに」で提起した「労働価値説の運命を問う」私の問題意識にとっても、「決定的な跳躍点である」ことを、後段で論じる論点であるが、予め指摘しておきたい。

そこで、この「労働の二重性」を念頭におきながら、新生労働価値説の特質について考察を進めよう。

### [Ⅲ] 新生労働価値説

#### (A) マルクスと投下労働価値説

『資本論』は第一部「資本の生産過程」第一章「商品と貨幣」の冒頭節「商品」論から始まる。そして、「商品に表される労働の二重性」論はその第二節において「詳しく説明する」とされていた。というのも、第一節での「商品の二つの要因」の説明との関連で既に指摘されていたからである。それは、周知のように、商品の使用価値を生産する具体的有用労働と商品の価値を形成する抽象的人間労働である。

ところで、冒頭節の「商品の二要因」については、古典学派と同様マルクスもまた、抽象力によって商品体から種々様々な使用価値の要素を捨象した上で、「諸商品に共通」な商品の価値を考察する。そして、古典学派とは異なったマルクスに特有な価値概念を、いわば命題の形式で冒頭からいきなり積極的かつ具体的に論述していたのである。

そこで、マルクスの労働価値説の骨格をなす基本的な規定を以下のように整理して列挙した上で、それがどのような性格のものであるかを、まず確認しておこう。しかも、それが古典学派の欠陥を超越して展開されたものだとすればなおのこと、マルクスの新生労働価値説とは一体

どのような性格のものであったかについては、特別の注意を払って確認しておく必要がある。

さて、全ての商品体は特殊具体的な有用労働の結果、様々な使用価値をもつ諸商品として存在するが、それらの商品体から全ての使用価値を捨象するならば、

- (A) 使用価値を生産した諸労働の有用性も捨象されて、諸商品を生産した労働は「もはや互いに区別されることなく、すべて同じ人間労働に、抽象的人間労働に還元される」（52ページ）という規定。
- (B) 「だから、ある使用価値または財貨が価値をもつのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているから」（53ページ）という規定。
- (C) この人間労働の対象化は、「まぼろしのような対象性」であり、「無差別な人間労働の凝固物」であり、「社会的実体の結晶」（52ページ）であるという規定。
- (D) したがって、この抽象的人間労働の性格は、「まぼろしのように」でありながら「社会的実体の結晶」として存在する不思議な「凝固物」という規定。
- (E) 商品価値の大きさは、「価値を形成する実体の量」すなわち「労働の量」であり、それは「労働の継続時間」で計られ、「労働時間は1時間とか1日とかいうような一定の時間を度量標準としている」（53ページ）という規定。
- (F) ただし、この労働時間は個々人の個別的労働時間によって規定されるのではなく、「社会的平均労働力」の労働時間として、それは「社会的に必要な平均労働時間」という性格をもつという規定。
- (G) なぜなら、「商品世界の諸価値となって現れる社会の総労働力は無数の個別的労働力から

成っているが、ここでは一つの同じ人間労働力とみなされて」、「個別的労働力のおおのは、社会的平均労働力という性格をもつから」（53ページ）という規定。

(H) そして、「社会的必要労働時間とは、現存の社会的に正常な生産条件と労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間」（同上）という規定。

(I) 第二節では、抽象的人間労働が別表現で具体化されて、一層明確に「人間の脳や筋肉や神経や手など」労働の際に投じられる「生理学的意味」での労働という規定。

以上のような規定をもつ価値概念について、マルクスは「ある使用価値の価値量を規定するものは、ただ、社会的に必要な労働の量、すなわち、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである。個々の商品は、一般に、それが属する種類の平均見本とみなされる」（54ページ）と要約した上で、さらに端的に、「価値としては、すべての商品は、ただ、一定の大きさの凝固した労働時間でしかない」（54ページ）と結論する。

ここには、以上から価値概念が、(D) 項で示唆したように超感覚的で目に見えない「まぼろしのような」人間労働の対象化でありながら、しかし「まぼろし」そのものではなく、「社会的実体の結晶」として内在的に商品体に封じ込まれている「社会的に平均的な労働時間」の「凝固物」だ、と把握されていることは明らかである。特に、価値概念を、抽象的人間労働が社会的に必要な労働力として生産のために投下された「労働の継続時間」という、(E) や (F) に見られるような時間概念でもって——その意味で現実的に規定していた点は、新生労働価値説の



特質であって、注目に値する、とあってよい。

さてそこで、上のような特質をもつマルクスの価値概念から判断する限り、この新生労働価値説は、スミスの場合とは異なって、本質的に投下労働価値説の範疇に属するものだ、ということができよう。もちろん、ある種の素朴な投下労働価値説ではなく、抽象的人間労働という規定をもった労働の投下であり、しかも「社会的に必要な労働時間」という社会性を担った労働時間の投下という意味で、正確には社会化された抽象的労働投下価値説と称すべきかもしれない。とはいえ、本質においては、以上から明らかかなように、伝統的な投下労働価値説——投下労働による商品価値の規定——の範疇に属するものだ、と解することができる。もっとも、マルクスの価値概念が、『資本論』の全体を通してこの社会的投下労働価値説で終始一貫していた、というのではない。『資本論』の第三部で「資本主義的生産の総過程」を論じる第二篇の第十章には、諸資本の競争との関連で市場価値という新たな価値概念が登場して鋭意考察されていたことを、われわれは既に知っているからである。

けれども、『資本論』の冒頭で命題的に提示されたマルクス価値概念の性格が本質的には投下労働価値説であった、ということの確認は重要であり、そして、それはある黙示的な意味を孕んでいるように思われる。ただし、この社会的投下労働価値説の規定から、マルクスが「社会的必要労働時間」といった社会的な時間概念を特に強調したり、さらには「生理学的意味」における人間労働の性質をことさらに力説していたことには、ある特別な意味がありそうな予感を禁じえないからである。この予感が何であるかは、後論で指摘する機会があるかもしれない。

それはともかく、第一節では以上のようにマルクスの価値概念が投下労働価値説に属するという性格は、では古典学派価値説の欠陥を超越するために展開されたと考えられる、第三節の価値形態論を経た後でも同様であったか、それとも変化したであろうか、興味深く検討しなければならない。だが、この問題へ移る前に、「私をはじめ批判的に指摘した」(56ページ)という「労働の二重性」論の考察は決して忘れられてはならない。

さて、これまで検討したように、冒頭節では商品体から種々の使用価値とそれらの生産に用いられた有用労働とを捨象した上で、古典学派とは異なった精緻な価値概念を示した後、それを承けて、マルクスは「商品に表される労働の二重性」論が「経済学の理解にとって決定的な跳躍点」であると強調して、特に注意を喚起していたことは周知の通りである。

では、「決定的な跳躍点」とは一体何を意味するのか。

それは、これまでの文脈から明らかかなように、まず第一に、この「労働の二重性」論が古典学派労働価値説の欠陥と曖昧な労働の規定に対して、根源的な批判の論拠であっただけではなく、労働価値説を救済する命綱をも提供した、という意味で「跳躍点」であった、ということができよう。換言すれば、古典学派労働価値説の胎内に新しい生命を受胎させて、新生労働価値説の生誕を促す「決定的な跳躍点」こそ、まさにこの「労働の二重性」に関するマルクスの確固たる知見であった。それ故に、この節では、改めて商品体とは、この「労働の二面的性質」が一個同一の商品の中に含まれている労働合体の産物であることを確認した上で、これから古典学派の欠陥に正面から挑む価値形態論へと「跳

躍」するための、いわばスタートラインに立つことの宣言の節でもあった。しかもこの節は、次節の価値形態論の展開を通して、両者の労働合体の関係が対立と分裂へといずれ転化することを暗示してさえいるのである。

第二に、この節では、抽象的人間労働と同様に当然ながら有用労働の規定に関しても種々の論述がなされているが、とくに生産力の変化に対しては、両者の労働が「相反する」関係にあることを、次のように述べて注意を促していた。

「生産力は、つねに有用な具体的な労働の生産力であって、…合目的々生産活動の作用程度を規定する。…これに反して、生産力の変動は、価値に表わされている労働それ自体には少しも影響しない」（60ページ）、と。

そしてこの節の末尾で、具体的有用労働の感覚的で可視的な実在性に対して、抽象的人間労働も「まぼろしのような」不可視なものでありながら、しかし決して「まぼろし」ではなく、「生理学的意味での人間労働力の支出」という点で、人間労働の現実的姿態として実在的であることをあえて示唆し、したがって人間労働は双方の労働の結合体として実存する、と以下のような文章で結んで、次節の価値形態論へ向かってスタートを切るのである。

「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であって、…この抽象的人間労働という属性において商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性において使用価値を生産する。」（61ページ）

ところで、以上のような第二節の孕む「決定的な跳躍点」の意義を脳裡に刻んだ上で、じつはこの節が私にとっても「跳躍点」であること

を以前にも示唆しておいたが、それについて、「労働価値説の運命を問う」私の立場から、若干の論点を考察しておきたい。

先にも触れたように、第一節の価値論で捨象された使用価値と有用労働の有用性について、マルクスが第二節の冒頭で、以下のように規定していた点に注目したい。

「使用価値を生産するためには、一定種類の生産的活動が必要である。この活動は、その目的、作業様式、対象、手段、結果によって規定されている」（56ページ）、と。

商品の使用価値を生産する「生産的活動」には「その目的」から始まって様々な段階や態様がある、と指摘する。とすれば、「商品に表わされる労働の二重性」の有用労働は、「生産的活動」の最後の段階である「結果」に対応する労働、ということになる。なぜなら、「その目的」から始まって「作業様式、対象、手段」などの、いわば商品生産の準備過程では、未だ商品は生産されていないからである。したがって、ここ第二節での有用労働の規定は生産過程の「結果」完成した商品を対象としたものであり、あくまで「商品に表わされる有用労働」であって、その意味では「直接的生産過程の結果」に関する規定であった、ということになるだろう。

以上の文脈から問題を読みとるとすれば、「その目的」から始まる様々な準備過程に支出された、「商品に表わされる労働」以外の労働について、それはどのような性格の労働なのかを問う必要がありそうだ、ということである。しかも、この準備過程に投げられる労働は、その有用労働によって生産力の水準や変動を規定することにもなるのだから、この種の労働の性格を検討することは一層必要だ、といってもよい。要するに、生産的活動としての一連の準備過程とそ

こでの「商品に表わされる労働の二面的性質」に包含されない労働の問題が不問に付されているようだ、という疑念である。この疑念が私にとっての「跳躍点」をなすものであって、後段で論じるように私の現代労働価値説を展開するヒントの一つであった、と言えるかもしれない。

このような疑念を脳裡に深く秘めながら、次の価値形態論について若干考察しておこう。

### (B) 魅力に富む価値形態論の主題

第三節「価値形態論または交換価値」については、既に述べたように、古典学派労働価値説に欠落していた、マルクスに独自の革新的理論の一つであるだけに、古くから長きに亘って多彩な論議や批判など多くの研究が積み重ねられてきたし、恐らく今後も価値論の試金石を問う考察対象として研究が深められていくに違いない。それほど、魅力に富んだ革新的理論であるが、同時に、論述が極めて難解だけでなく内容も多くの特有な概念を駆使して構成されているため正確な理解が容易ではない。

では、何が魅力的で、どうして難解なのか。

まず何よりもこの節の魅力的な特質として強調しておきたいことは、この節が商品の価値を、すぐれて交換における社会的関係——これをマルクスは諸商品の価値関係という——として把握する立場、すなわち価値とは交換関係のなかでしか表現されない純粋に社会的な性格のものと解する立場に終始一貫している点である。通俗風にいえば、商品は、他人のための使用価値の故に自分自身の価値を自ら示すことが出来ず、他の商品との関係に媒介されてしか自分の価値を表現しえない宿命をもってこの世に生まれたもの、というのである。このことを、マルクスは「価値対象性は、商品と商品との社会的な関

係のうちにはしか現れない」と記述する。そして、このような第三節の立論的特質を、前の第一節で定義したこれまでの価値概念の立場と区別するために、晦渋な表現で以下のように語るのである。

「われわれが、(第一節で論じたように一筆者挿入) 価値としては商品は人間労働の単なる凝固である、というならば、われわれの分析は商品を価値抽象に還元しはするが、商品にその現物形態とは違った価値形態を与えはしない。一商品の他の一商品に対する価値関係のなかではじめて……………その商品の価値性格が、他の一商品にたいするそれ自身の価値関係によって現われてくるのである」(65ページ)、と。

このような諸商品の交換における価値関係の拡がりに対応して——つまり A, B, C, D, 四項目の価値形態の論理的で段階的な展開を通して——、商品の価値を、その現物形態とは異なる価値形態、すなわち相対的価値の形態として展開し、そしてこの展開をもって、じつは現実にも価値の実体がすべての商品に共通で同等な「同じ人間労働に、抽象的人間労働に還元される」ということの証明を企図したのが価値形態論の主題であった、と私は単純に解するのである。ただ、この節の以上のような魅力にも拘わらず、表現の晦渋さに加えて内容も錯綜して理解困難だけでなく、商品と価値に関する深遠な弁証法的考察でもあって、次節の「商品の呪物的性格」の論趣と重なる点でも難解だ、といつてよい。

以上のように、この節の難解さとその特有な構成、また多様な概念や重厚な哲学的考察のために、この節を巡ってはそもそも主題は一体何かということから、その他様々な議論が提起されてきたことは、前にも指摘した。例えば、こ

の節を貨幣の必然性の解明と解する立場に始まって、価値形態を流通形態と読み替えて労働価値説の再構成を企図する試み、あるいは、商品所有者の欲望の有無を巡る論争、さらには価値の実体から価値の形態への展開による貨幣の生成が逆に価値の実体を否定するといったユニークな見解なども主張されている。なるほど、このように多彩な論説が提起されること自体、この節が魅力に富んだ理論であることの証しとあってよいだろう。

一般的にいて、理論の内容がそれぞれの論者の問題意識や立場によって深められたり、あるいは批判的な検討によって新しい理論が生まれたりするが、改めて本稿の問題意識と立場から価値形態論の主題を述べれば、以下のような最も単純素朴な理解となる。

前にも一言触れたが、商品の価値は交換における社会的関係のなかでしか表現されない、端的に言えば価値とは社会的関係性の塊である、ということから、商品の価値が、交換における価値関係を通して、全ての商品に共通な純粋に社会的な性質をどのような形態で現実に示すことになるかという問題を、その価値関係の段階的展開を通して究明すること、そしてこの究明によって価値対象性としての抽象的人間労働の実在性を論証しようとするのが、価値形態論の主題であった、と単純に解するのである。この私の主題理解を別の観点から、第三節を第一節の価値概念の抽象化の方法と区別する先のマルクスの言及に倣って言えば、第一節で論定された価値規定が商品体からの使用価値の捨象という抽象方法によるものであり、その限りで論証抜ききの命題であったのに対して、ここ第三節の価値形態論では、この抽象方法によって獲得した価値実体の実在的形態を、今度は交換におけ

る価値関係の展開のなかで諸商品の使用価値が事実上いかに捨象されるかという観点から考察することでもあった、と解釈することもできるだろう。古典学派労働価値説の欠陥は、このような諸商品の社会的な価値関係に即した展開方法によって克服されることになる筈であったし、またその意味でも、価値形態論が「労働の二重性」の現象形態の展開という理論的意義をも兼ねることになるのである。

それでは、このような理解に沿って、果たして価値形態論がどのように展開されていたかを簡単に追跡しながら、本稿の立場から問題点を若干考察しておきたい。

#### A. 形態Ⅰの単純な価値形態とその特質について

まず二つの商品20エレのリンネル = 1 着の上着の等置関係を掲げて、リンネルを能動的な相対的価値形態、上着を受動的な等価形態という両極の価値関係が示される。そして、リンネルの価値形態の内実を知るには、「この価値関係を量的な面からまったく離れて考察しなければならない」（65ページ）と注意を促して、価値関係における質的同等性を媒介にした両極の等置関係の分析が課題であることを強調する。その表現として端的に「リンネル = 上着というのが等式の基礎である」（同上）と明言し、両商品の異種労働が等置を介して共通の同等性に還元される関係を次のように説明する。これも晦渋な表現で、かつ少々長文だが、重要な論点なので引用しよう。

「上着が価値物としてリンネルに等置されることによって、上着に含まれる労働は、リンネルに含まれる労働に等置される。上着をつくる裁縫は、リンネルをつくる織布とは種類の違った具体的労働である。しかし、織布との等置は、

裁縫を、事実上、織布の労働と現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。このような回り道をして、次には、織布もまた、それが価値を織るかぎりでは、…抽象的人間労働であることを示すのである。……というのは、異種の諸商品の等価表現は、異種の諸商品の諸労働を、実際に、それらに共通なものに、人間労働一般に、還元するからである」(65ページ)。

先の「リンネル＝上着」の等式から直接推論して、両者に共通な同等性を抽象するのではない。それは第一節の課題であった。そうではなく、問題は、この等式が何を表現しているか、である。この等式が語っているのは、リンネル商品は上着という他の商品との等置によってはじめて、互いの具体的労働を「人間労働という両方に共通な性格に還元する」ということ、そしてこの還元という回り道を媒介にリンネル労働が抽象的人間労働であることも認知される、という商品相互の価値関係と価値表現なのである。したがって、両者を同質同等性に還元する「回り道」の論理が重要なのである。また、この価値関係では、リンネルの価値が商品上着の使用価値で表現されていることもこの形態の特質として、「商品上着の現物形態が商品リンネルの価値形態になる」、と指摘する。

さて他方、商品上着がリンネルとの価値関係のなかで現物のまま等価形態となることによって、この形態の三つの特色が示される。第一は、既述のように「使用価値がその反対物の、価値の現象形態になる」ということ、第二は、前者に対応して「具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になる」という、価値関係の特有な現象形態のことである。さらに、この等価物の労働がリンネルの労働と同等であ

ることによって、「それは、すべての他の商品生産労働と同じに私的労働でありながら、しかもなお直接に社会的な形態にある労働」(73ページ)という、等価形態に含まれる新たな労働の性格を第三の特色として提示する。そして、この等価形態の労働が「直接に社会的形態の労働」であることによって他の商品との直接的交換可能性を有することになる、というのである。この点は、等価形態が潜在的に貨幣形態への萌芽を含んでいるというわけだが、同時に、社会的必要労働時間や社会的平均労働といった第一節で措定された価値概念の歴史的な展開への示唆を含んでいる、といってもよからう。

最後に、形態Ⅰの「全体」を総括するなかで以下のように述べ、交換価値の意味について重要な論点を提起する。

それは、「一商品の単純な価値形態は、異種の一商品に対するその商品の価値関係のうちに、すなわち異種の一商品との交換関係のうちに、含まれている。商品Aの価値は、質的には、商品Aとの商品Bの直接的交換可能性によって表現される。……商品Aは、(このような関係を通して、一筆者挿入) その価値が現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をもつ。……一商品の価値は、それが「交換価値」として表示されることによって独立に表現されている」(74ページ)、という価値の現象形態としての交換価値の規定である。ここには、価値と交換価値との概念的区別が明確にされているとともに、交換価値がここでも価値関係における異種労働の同等性への還元という回り道の論理によって説明されている点、現代の貨幣機能との関係で改めて検討されてもよいであろう。

B. 形態Ⅱの全体的な、展開された価値形態について

形態Ⅱは、リンネルの相対的価値が商品世界の無数の使用価値で表現され、無数の商品体はリンネル価値の鏡としての等価形態の関係にある。この形態について、マルクスは、「リンネル価値そのものが、はじめて本当に、無差別な人間労働の凝固として現われる」（77ページ）という点を特質として強調し、そしてその理由を「いまや明瞭に、リンネル価値を形成する労働は、他のどの人間労働とも等しいとされる労働として表わされているからである」（同上）と語るのである。同様のことが使用価値の観点から、「リンネル価値の諸表現の無限の列のうちに、商品価値はそれが現われる使用価値の特殊な形態には無関係だということが示されている」（同上）とも語られている。

形態Ⅱのこのような特質のゆえに、「いまではリンネルは、その価値形態によって、形態Ⅰのようなただ一つの商品種類に対してだけではなく、商品世界に対して社会的な関係に立つ……商品世界の市民である」（同上）ことを確認する。この形態で、「無差別な人間労働」を代表する一商品が、いまや商品世界の市民と認められることから、次の純粋に社会的で一般的な価値形態Ⅲの世界への転化を促すことになる、と解釈することもできよう。こうして形態Ⅲが成立する。

C. 形態Ⅲの一般的価値形態とその特質について

形態Ⅲは、前の形態Ⅱの関係を逆にしたもので、リンネルが等価形態となって、他の全ての商品の価値を単純に、かつ統一的に表現する形態である。この形態の特質は、「すべての商品の価値を、その商品とリンネルとの同等性によって表わす。リンネルに等しいものとして、どの

商品の価値も、いまではその商品自身の使用価値から区別されるだけでなく、いっさいの使用価値から区別される。……………それだからこそ、この形態がはじめて現実に諸商品を互いに価値として関係させるのであり、諸商品を互いに交換価値として現われさせる」（80ページ）、という点にある。ここには、全ての商品の使用価値から区別された商品世界の価値関係が質的に進化して純化され、社会的に価値の世界、交換価値の世界が成立することを示唆している。

この形態の第二の特質は、「リンネル自身の現物形態が商品世界の共通な価値姿態なのだから、リンネルは他の全ての商品と直接に交換される」（81ページ）という等価形態の持つ直接的交換可能性が、商品世界から排除された唯一の商品体で示されていることである。そして、例の「回り道」の論理にここでも繰り返し言及して、その特質を次のように論じていた。

「一般的価値形態をなしている無数の等式は、リンネルに実現されている労働を、他の商品に含まれているそれぞれの労働に順々に等置し、こうすることによって職布を人間労働一般の一般的な現象形態にする。このようにして、商品価値に対象化されている労働は、現実の労働のすべての具体的形態と有用的属性とが捨象されている労働として表わされているだけではない。……………この労働は、いっさいの現実の労働がそれらに共通な人間労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元されたものである」（81ページ）という「回り道」の論理を、この晦渋な文章は改めて想起させるかのごとく読みとれるからである。

さて、以上のような価値形態論の簡単な検討によっても、古典学派労働価値説の欠陥を克服

しようとするマルクスの強靱な「経済学批判」の精神と理論的格闘、そこから生まれた価値形態論の特質と新生労働価値説の性格が十分明らかになった筈である。ただ、本稿の問題意識であった「労働価値説の運命を問う」立場から、その性格を一層確認するために、二つの問題点を提起しておこう。

第一点は、形態Ⅲの等価物リンネルが最終的には「一つの独自の商品種類」の金に代わることによって、貨幣形態Ⅳの存在が説かれているが、この転化を以って貨幣の必然性が論定されたわけではない、ということである。貨幣とは何か、の理解だけではなく、マルクスも指摘しているが、貨幣は「どのようにして、なぜ、なにによって」貨幣になるか、に答えねばならない。だが、それだけでも十分ではない。現代の貨幣理論は、マルクスの新生労働価値説を超えた新しい労働価値説—現代労働価値説に基づいて構想すべきであろう、というのが価値形態論から学んだ私の問題提起である。

第二点、価値形態論の展開に一貫した特質が、価値関係に媒介された「人間労働の同等性」への「還元」という「回り道」の論理であったが、この「回り道」による価値規定といえ、じつはスミスの支配労働による価値規定が蘇ってくる。既に本稿の〔I〕で検討したように、スミスもまた「回り道」の論理と同様に、商品交換という社会的関係を媒介にして、価値を、自分の商品で他人の労働を支配し購買できる労働と規定していたからである。とすれば、マルクスは、価値形態論を通して、スミスのような支配労働価値説に傾斜したのであろうか、この疑問が第二の問題提起である。

本章の前段で私は、第一節「商品の二要因」で提示された種々の価値規定から判断すれば、

マルクスの新生労働価値説の性格は、本質的に、投下労働価値説のカテゴリーに属する、と指摘した。いま、上の疑問に対しても全く同様に答えたい。価値認識の方法上はスミスに似ていても、全く非なるもの、と。むしろ逆に、新生労働価値説は、投下労働価値説に一層純化され精緻になった、といえよう。

価値形態論では、本来、相対的価値形態が主役であり、等価形態は受動的な客体である。その相対的価値は商品相互の価値関係という「回り道」の媒介によってはじめて現実に規定される以外にはない。そして、価値形態論の展開が明らかにしたことは、「回り道」の媒介によっても相対的価値の内実が変わるわけではなく、逆に、この「回り道」によってこそ、内実である価値の本性が投下された抽象の人間労働であり社会的労働であることを証明したことである。じつはマルクスもまた、価値形態論の分析が証明したこととして、次のように論述していた。

価値形態論における「分析が証明したように、商品の価値形態または価値表現は商品価値の本性から出てくるのであって、逆に価値や価値量がそれらの交換価値としての表現様式から出てくるのではない」(75ページ)、と記しているように、マルクスも確かに投下労働価値説を承認していた、と解することができる。

では、マルクスに改めて問いたい、価値形態論によって価値概念が一層社会化されたが、でもどうして投下労働価値説なのか？

その答えを見付けるためには、マルクスとともに、われわれも資本の生産過程に入っていかなければならない。第二篇「貨幣の資本への転化」論の後で、資本の生産過程が労働過程の考察を経て、第三篇の価値形成・価値増殖の過程で説明された剰余価値生産過程のなかに、である。

この過程で執行される内容、すなわち労働力の商品化による労働力の売買を過程の前提に、この労働力商品の特有な性質によって資本の生産過程が価値増殖過程となる理論的内容については、既に周知のことであって、ここで詳細を述べる必要はない。ただ、この剰余価値論は、マルクスが近代資本主義社会成立の本質的な基礎要因として当時のイギリス資本主義のなかから発掘した理論であり、同時にこの本質が隠蔽される関係を暴露した画期的な理論であった、ということとは指摘しておこう。

そこで問題は、この過程の内容を正確に分析し論理的に解析し、そしてその論理の正当性を証明するための方法であり、理論的装置である。そのために設定された諸概念・諸規定の統一的な説明原理といってもよい。労働力商品の価値規定をはじめ、剰余価値、生活手段の価値、日価値、社会的必要労働時間、社会的平均労働時間、労働力商品に関する必要労働時間と剰余労働時間などは、剰余価値の生産がいかに行われるかを純粹に分析し、そして正確に説明するために措定された不可欠な概念である。したがって、それらは相互に共通で統一的な関連性をもつ原理によって説明されなければならないのである。だからこそ、この統一的で共通な説明原理としての価値概念が、他ならぬ投下労働価値であったし、しかも第一節における種々の価値規定から始まり、価値形態論によって社会化と精緻化を加味された抽象的労働投下価値であった。なぜなら、剰余価値生産過程の秘密を純粹に分析して解明するためには、あらゆる価値を抽象的人間労働に還元し、この人間労働をさらに抽象的時間に統一することによってはじめて量的に比較考量できるからであり、またその必要があったからである。むしろ逆に、労働力商

品の価値などその他の概念は、価値形態論の回り道の論理によって実在性が証明された社会的価値を前提にはじめて、統一的な抽象的時間に還元されて比較考量できるのだ、と言い替えてもよいであろう。端的に言って、剰余価値生産の本質を純粹に分析して論証するためには、投下労働価値説でなければならなかったのである。いずれにしても、第一節で定義された (E), (F), (G), (H) 項などの価値規定がここで再登場するのは、そのためである。しかも、社会的平均労働や社会的必要労働時間などの規定が成立するのも、機械制大工業の現実の発展によることにも注意が向けられる。

以上から明らかなように、マルクスが投下労働価値説を承認した最大の理由は、それが剰余価値生産を純粹に分析し正確に説明するための不可欠な前提だったからだ、といっても過言ではない。

ところで、その剰余価値は労働力商品の再生産に必要な労働時間を超える剰余労働時間の産物であって、労働力の売り手である労働者にとっては「搾取された労働時間」であり、したがって労働者の労働は「搾取される労働」ということになる。そして、この「搾取される労働」が、近代市民社会の平等な権利の下では、合法的で合理的な搾取であることは、労働力商品の売買を巡ってマルクスが説いている通り、「搾取する」資本家の権利として公認されている。

けれども、この剰余価値論によって労働者の「搾取される労働」に対する自覚が近代市民社会において彼らの階級意識と権利意識を鼓舞して、労働時間短縮と労働条件の改革など労働日をめぐる階級闘争が歴史上澎湃として起こったことも周知の通りである。『資本論』の剰余価値論が労働者階級に権利意識、さらには市民的自由と



平等の精神、ヒューマンイズムの思想を植え付け、彼らの社会的地位と生活の向上に果たした貢献は、どれほど強調してもしすぎることはない。この点は、今日においても『資本論』の歴史的役割として高く評価されなければならない。言うまでもなく、労働者階級のこの権利闘争は今後も続けられねばならない。

### (C) 「搾取する労働」を跳躍点にして

ところで、既に考察したように、この剰余価値の生産では、生産手段や労働力の価値もすべてが労働時間に還元されるのであるから、いわば労働時間の量的世界が設定されていたわけである。マルクスもこのような量的世界について、以下のように記述していた。

「同じ労働過程が価値形成過程ではただその量的な面だけによって現われる。問題になるのは、労働がその作業に必要とする時間、すなわち労働力が有用的に支出される継続時間だけである。ここでは、労働過程に入って行く諸商品も、もはや、合目的的に作用する労働力の機能的に規定された素材的な諸要因としては認められない。それらは、ただ対象化された労働の一定量として数えられるだけである」(209ページ)。

上文で明らかなように、労働過程が、ここでは、剰余価値生産の本質を純粹に分析するために、過程の素材的諸要因も素材として認められず、もはや、価値形成過程のなかに溶解されている、といわざるをえない。その意味で繰り返しになるが、マルクスは労働過程を、剰余価値生産の本質を解明するため、とはいえ、ただ価値形成過程一色に解消してしまった、といわねばならない。だが、労働過程は、価値形成・増殖過程であると同時に、「労働の二重性」論でマルクス自身が誇示したように、労働者の有用労働

が商品の使用価値をつくる生産過程でもある。この商品の使用価値は、「搾取される労働」の側の労働者にとっては関心事ではないだろうが、「搾取する労働」の側の資本家集団、現代のタームでいえば、企業経営を担当する経営者集団にとっては重大な関心事である。彼らは、まず何を、どのような商品を、どれほど、どこで、どのようにして造るか、を決めるだけではなく、現代では、イノベーション、M&A、マネージメント、異業種の開発、市場調査、知的財産、不採算部門からの撤退といった企業の死命を制する企画なども決めねばならず、そしてその決定権に対しては責任を負わねばならない。もし誤算があれば、企業経営は破綻する。彼らの労働は、マルクスのタームでいえば、「貨幣の資本への転化」を決断して実行する経営者の頭脳労働であり、それゆえに、特殊的、個別的労働ではあるが、この労働が商品の使用価値の生産と関連する以上、生産的労働である。同時に、労働者に対しては「搾取する労働」である。

以上のように、「搾取する労働」は、一面では企業の命運を懸けた企画、経営方針などの決定権者であり、他面では労働者の剰余労働を搾取するために行う準備活動である。したがって、「搾取する労働」は剰余価値生産の原因をなすものであり、他方、「搾取される労働」は「搾取する労働」によって準備された「直接的生産過程」の結果である、といってよい。換言すれば、「搾取する労働」は生産過程を含む企業活動すべての決定権者であることによって、剰余価値の生産に対する能動的な主体であり、「搾取される労働」は受動的な客体である、ということもできよう。この主体と客体の関係を確認することは重要である。なぜなら、「搾取する労働」が原因ならば、結果との対応で、「搾取する労働」がど

のような性質の労働なのかという問題を、経済学が長い伝統と研鑽の下に継承してきた労働価値説の俎上に乗せて改めて考察する必要があるからである。現代労働価値説はこの問題から始まることになる。

この点で、新生労働価値説に関していえば、マルクスの場合、「搾取される労働」の秘密を解き明かすために、生産過程の素材的要素はもとより全ての価値を労働時間の量的世界に還元した結果、剰余価値を生む同じ労働が有用労働として商品の使用価値も造るという使用価値の質的契機が排除されて欠落することになった。思うに、マルクスは、ここでは、あえてこの質的契機を排除したが、それだけではなく、さらに言えば、「搾取する労働」の側の問題も意図的に無視したのではないか、とも考えられる。搾取論としての剰余価値論とこれを基礎に労働者階級の運命を激越に論じた「資本主義的蓄積の一般的法則」を世界に向かって宣言できれば、「搾取される労働」からの解放と万国の労働者の団結を訴える19世紀の革命家マルクスにとっては、剰余価値生産の秘密を暴露するだけで、十分だったのかもしれないからである。

けれども、マルクス生誕200年後の現代に生きるわれわれは、冷静になって、「搾取する労働」

を、もう一度マルクスの提起した「労働の二重性」の位相にまで立ち戻って考察し、資本の総生産過程のなかで正当に位置付けることから始める必要があるだろう。「労働の二重性」論については、既に本稿の前段で、同様の問題への疑念とともに現代労働価値説を考えるヒントが示唆されていたことを述べておいたが、これまでの論脈に照らして、さしあたり、現代労働価値説は、「搾取する労働」を「商品に表わされる労働の二重性」に加えて、「総生産過程で機能する労働の三重性」と規定しておこう。そして、資本の総生産過程では、この「搾取する労働」は、「搾取される労働」が生産した剰余価値を取得する権利を有するとともに、自らも新たな価値を創造して商品の価値に付加するのである。私はこれを今後付加価値と呼び、したがって、商品の価値は、剰余価値に加えてこの付加価値部分をも含んで規定されることになるだろう。

次章では、このような現代労働価値説の展開が課題である。

いまや、「搾取する労働」を跳躍点にして、マルクスに学びつつマルクスを超えて、われわれの現代労働価値説へと、さあ跳んでみよう。

〔九州大学名誉教授〕